

●先日、あの『若大将』がスクリーンに帰ってきたと思ったら、今度は『月光仮面』が帰ってきた。昨今は

奇怪な一匹の生きものを どう世の中に送り出すか

たり、現代ふうになっているが、とにかく古いパターンの話だといっている。そして白馬スク・白マンツの月光仮面が白オートバイに乗って、神出鬼没に地を走り空を飛ぶ。

どうも復古調が流行らしい。あるいは映画の作り手に、新しいアイデアを生み出す能力がないのか。

だが、かまやしない。映画のおもしろさなんて、昔も今も基本的に、そうそう変わるものではない。問題は、どんなふうに戻ってきたか、である。

少なくとも『帰ってきた若大将』は、十数年の時代の隔たりをあつげらかんと越えてしまう奇妙さに、おもしろさを感じられた。その奇妙さこそ加山雄三なるスターの力であり、画面の息づきによってそれが映画の生命と化していたからにちがいない。

新作『月光仮面』のほうは、はたしてどうか。

若者たちを集めて『ニュー・ラブ・カントリー』という樂園の建設をめざす集団があつて、資金づくりのため、銀行や現金輸送車を『レッドマスク団』の名のもとに襲うのに対し、正義の味方・月光仮面が闘いを挑む……。

ざっとそんな筋立てである。ローソクを立てての宗教的雰囲気、ラスト近く、赤ワインで集団自殺を図ろうとするところなど、なにやらアフリカの人民寺院事件を思わせ

まったく時代錯誤もいところの映画、といえよう。むしろそのアナクロニズムの荒唐無稽さこそが、この映画の核心であり、痛快さの源泉である。

ところが、そいつが画面上、ついに不発のまま終る。アナクロの荒唐無稽さが、映画の魅惑となつて炸裂しないのだ。

単純なダメ映画ではなく、ある側面はかなりおもしろい。たとえば、善玉・悪玉の設定ぐあいを見てみよう。月光仮面が「正義」を看板にしたストレートな善玉であるのに対し、悪玉のほうはじつに屈折している。『ニュー・ラブ・カントリー』の名のとおり「愛」の樂園をめざしながら、悪を行なわねばならぬからだ。つまりこの映画は、「正義」対「愛」の闘いを描くわけである。

この闘いの構図はたいへんユニークではなからうか。じつさい闘いが進展するにつれ、悪にまみれねばならぬ「愛」の屈折ぶりによって、月光仮面の「正義」の空虚さが浮き立ちかける気配など、なかなかおもしろい。

だが、すべては着想や気配の段階に留まって、画面上、それからさきへは展開しない。